



現代の文学 = 5

大佛次郎集



帰郷  
新樹

河出書房新社

現代の文学 5 大佛次郎集

© 1965

責任編集

川端康成 丹羽文雄  
円地文子 井上靖  
松本清張 三島由紀夫

---

昭和 40 年 4 月 1 日 初版印刷  
昭和 40 年 4 月 8 日 初版発行

定価 390円

著者 大佛次郎  
発行者 河出孝雄  
印刷者 高橋武夫  
装幀 原弘(N.D.C)

印刷・大日本印刷株式会社  
本文用紙・本州製紙株式会社  
函貼・神崎製紙(ミラーコート)  
同納入・東邦紙業株式会社  
クロース・日本クロス工業株式会社  
同納入・株式会社小島洋紙店

発行所 東京都千代田区 株式会社 河出書房新社  
神田小川町三の八

電話東京 (291) 3721~7  
振替口座 東京 10802

---

製本・加藤製本

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

帰郷……………三

新樹……………二九

年譜……………五〇

解説……………福原麟太郎…五二

挿画 竹谷富士雄  
写真 三木 淳

大佛次郎集



歸

鄉

孔く 雀じゃく

「如何です？」

と、画家は連れを返り見た。

「なかなか景色の好いところでしょう」

一時間ばかり前に、強いスコールが過ぎて行った後で、くすんだ赤瓦に白壁の多いマラッカの町は、繁る熱帯の樹々とともに、洗い出されたように目に鮮やかな色彩を一面に燃え立たせていた。雨雲の一部が裂けて、凄じいばかりの日光が降りそそいでいる。町を縁取っている海は、まだ黒雲の下にあつて、泥絵具で描いたように光のない灰色をしていたが、これもやがて晴れて来るので、見ている間に、青みをさして変化して来る。その青い色が、まだ極めて沈鬱な調子のもので、遠景に長く突き出している椰子の林ばかりの黒い岬とともに、光の氾濫した町を一層絢爛としたものに見せているのだった。刻々と、その光は動いて、海の上にはみ出して行こうと

する。

「丁度いい時、来たんですなあ」

と、画家は向きを変えて、ゆるい坂道を前面に在る昔のキリスト教の寺院が廃墟となつて、四方の壁だけ大きく立っているのを見上げながら歩き出した。

丘の斜面の芝原で柄の長い鎌をふるって草を刈っていたマレー人が、二人を見て高野左衛子の日本の着物の姿に驚いたように手をやすめて突立って見ていた。日本人が出会って見ても、この南方では、はっとして眺めるほど、純粹の日本の夏姿であつた。いや、昔の東京の町なかでもホテルのロビーにいる時か、歌舞伎の廊下でも歩く時でないかと、芸者でない限り、これまでに、大胆に人目を惹く身なりを、しかもきりつとした感じに着こなす女は見られない。

高野左衛子は、内地の生活では洋装一点張りだったのが、シンガポールへ来るようにきまると、普通ならば和服に慣れた者も洋装に変えるところを、逆に、日本の夏の着物や帯を揃えて持って来た女で、落着いた好みに、どこの令夫人かと町で人を驚かすかと思うと、思い切つて派手な白縮緬の染浴衣で、平気で自宅で客の前に出ていた。

「驚いていますよ」

「え？」



「いや、あのマレー人の先生が、あなたを見て吃驚して  
いるというんですよ」

過去にただの磨き方でない時期があったと知れる。白  
い顔の皮膚がしっとり輝くようなのが、笑って、  
「お化けだと思ふんでしょうか」

「いや、きれいなものは、風俗の違う国へ行っても、き  
れいに見えることは、間違いない」

「小野崎さんは、お口がお上手ですから」

「いや、そうじゃない」

ブンガ・チナの大きな木が一面に大輪の白い花を付  
け、雨後のせいで強く匂っているのを見上げていた。

その花の匂いだけでなく、どの木も草も匂っている。  
土も匂っている。寺の廃墟の内部に入ると、屋根はな  
く、筒抜けの青天井で、四方の壁の隙間にも、小さい木  
が枝を伸ばして髯を生やしたように繁っていた。毀れた  
窓からは青い海が覗いている。

「あら、空っぽ？」

「ポルトガル人が建てたのが、和蘭陀人が攻めて来た時  
毀れてしまったんですね、古いものなんです。千六百何  
年っていうから、ざっと三世紀昔のものだ」

何もない内陣の石の床に、羅典文を彫刻した平たい大  
きな墓石が寝かせてあるのが、織田信長の時代に日本に  
切支丹の布教に来たフランシスコ・ザビエルの遺骸が、

この下に一時埋っていた位置を記念するものである。そ  
の他にも幾つかの同じ形の墓標が、船の画や、紋章らし  
いものや文字を彫刻して残っているが、昔あった位置も  
わからなくなっているらしく、壁に立てかけて並べてあ  
る。頭蓋骨に、骨を二本組合せて、墓には不似合いに感  
じられる絵もあった。

しかし、これは左衛子には、あまり興味のないことら  
しく、あたりを見回していた。外陣の床も草で一面であ  
る。小鳥が外の木の繁みに隠れて啼いているだけだ。

「これだけです」

「でも、いいところね」

「いつか来た時は、朝だったせいか、蝙蝠が幾つも飛ん  
でいましたっけ」

歴史という考え方が、画家の頭に泛んだ。

「最初に、ここに土人の王朝があって、そこへポルトガ  
ル人が攻め込んで来て城を作ったのを、和蘭陀人が来て  
占領し、その後で英国が手を入れたんですね。それから  
今度は、日本人が来て……この後は、また、どこの国が  
来るんでしょうかね。黒子のように小さい土地だけれ  
ど」

「外の景色がいいわ。小野崎さん、どこか写生をなさる  
の」

「あなたに待って頂くのは、お気の毒ですから」

「いいんです。あたし、アブドラに運転させて、町の方を見て、いい時分にお迎えにまいりますわ」

「それア有難いんですが、買物をなさるにしても、もう町には何も残っていないでしょうよ」

「女だけで危険なことは御座いますまいね」

「いいえ、もう静かな、人気のいい町ですから。僕なんか、のんきに、ひとりどこへでも入って行きますよ。

やはり歴史のある古い町ですから、シンガポール辺りの人間ばかりうようよしていて人気の悪い新開地と違らし、とにかく小さいんです。自動車でしたら、往來にいはる誰れかを探そうとなさったら、二十分も走らせたら必ず、どこかで見つかるでしょう。そんなに狭い……」

運転手は、芝刈りのマレー人のところへ行つて、ふたりとも悠長に芝に腰をおろして話し込んでいた。

「ドラー！」

と、名前のアブドラをちぢめて澄んだ声で左衛子が呼ぶと、小腰をかがめて敏捷に、自動車のところに戻つて来た。やがて自動車はエナメル塗の背を光らせながら、ゆるやかに坂を降りて行き、青い樹立の陰に姿を隠した。

「買出したな」

画家は、こう思うのだ。高野左衛子はそういう女なの

である。椰子の林が、黒い火花を連発したような形で海を縁取っているデュフィ好みのマラッカの明るい風景や、三世紀も昔に日本にも来た耶蘇の坊さまの墓などには興味はない。もつと、彼女は、現世的な本能を働かして動いている。

どういう由縁があつて、左衛子が海軍の特別の庇護を受け、三十そこそこの若さでシンガポールに来て、高級な料亭を開いているのは画家もまだ知らずにいるが、静かで貴族的な容貌に、目立って実欲的な欲望が組み合わさっていると知つても、別に驚かないのだった。

画家は、拳闘家のような巨きな肩をして見かけは堂々としているが、もう五十に手がとどいていて、髪など白い方が多く、青年ばかりの従軍作家の中では変り者扱いにされていたが、その代り、安っぽく驚いたり腹を立てたりするような性質はなくなっている。

ほんとうをいえば、この小野崎公平は、自分を画家だとは思っていない。若い時代に画家として勢い込んで仏蘭西に勉強に行ったのだが、巴里に着いて美術館を回っている間に、最初の一カ月で画を描くのを断念してしまつたという男であつた。もともと画家としては頭の冴えた方の男だったし、古今の大画家の作品の前に立って、自分の才能の限度が見えてしまつて、勉強しても無駄だと思ひ込んだのである。それからは、段々と身を持ち崩

して、ぼん引同様の留学生相手のガイドから寄席の楽屋番までして、日本に帰っても画を出さずに、美術批評をしたり、画商の真似をしたり、新劇の舞台裏で働いていた。そこへこの戦争で、内地にいては食えないと見ると、急に画家に戻って運動して軍属となって従軍した。巴里でやっていたように、もぐりの生活法であった。お座なりのスケッチで、画に素人の軍人をだますのは易しかった。ところが、他にすることが何もなかったという事情もあるが、南方に在る間に、ほんとうに自分で画を描きたくなっているのを知って、自分が先ず驚いたものだった。熱情が復活して来たのは、幸福であった。

命令次第で危険な前線近くまで出ることもあるので、暢気だが、どこかに死の影を予覚して、生きている間に何かしたいと思うようになったのかも知れぬ。

このマラッカの町は以前に訪ねた時から気に入っていた。色が複雑だし、静かな環境で、それも、過ぎた歴史の影が、土にも木にも滲み込んでいるような気配が、文学書なども読むのが好きだった彼に、暫くでも戦争を忘れさせてくれるのだった。

画家が丘の樹立の間を歩き回って、漸く場所を決めて絵具箱をひらいた時分に、高野左衛子は町に在る印度人の貴金屬商の店を見つけてアブドラに自動車を停めさせ

ていた。表通りだが狭く汚い町で、その店だつて小さくて、唯一の硝子棚の中には耳飾りの類を貧しく陳列してあるだけで、はだかの土間には、印度人が嚙んで吐き出す檳榔びんろうの実の唾が、血のように散らばっていて、足を入れるのが氣味が悪かった。

麻の服を着て、鬚ひげのたくましい印度人が、椅子から立ち上って、左衛子を迎えた。

「ダイヤモンド、ない？」

自由なマライ語であった。

印度人は、ターバンにつつんだ頭を、横に振った。

「御座いませぬ」

左衛子は、独得の鉛色の顔に白眼が際立っている相手の笑い方に、隠れているものを読み取っていた。

「心配ないのよ。藏しまつてあるんでしよう」

「ルビーだけ」

「じゃア、お見せなさい」

真昼の外の光が強烈だから、店の中は薄暗いが、自動車を走らせて風を受けて来た者には蒸暑かった。左衛子は、日本の扇を帯から抜き取りながら、往來の方を見た。日本人は絶対に通らなかつた。マライ女おんなか華僑わがうの男が歩いて過ぎるだけで、筋向うの店は空家のように埃によごれて戸が閉まっているのは、何の店か、もう売るだけの商品を失くしたものに違いなかつた。その屋根の上

に、同じ塔を二つ並べた教会らしい建物が伸び上つていた。暗緑色に塗って、青い立木とともに、乾いて侘しい風景である。左衛子は知らないが、ザビエルを記念した寺院であった。ルビーを数種類見て、黙って、その一つを言値で買い、軍票で支払いながら、

「ダイヤ、あるんでしょ」

ルビーは、そう追及する前提として買い取ったものであった。果して印度人の態度は変化して来ていた。

「ダイヤモンドは、日本軍が命令で買って行ったから、なくなりました」

「でも、一つや二つは、残っているでしょう。シンガポールでも華僑の店に行けば、ちゃんと奥から出して来て見せてくれるのよ」

「あっても高いです」

「お見せ」

たくましく傲慢に見えた鬚面は、遂に、護歩の色を見せた。三カラットばかりの大きさのダイヤモンドは、左衛子の華奢な指に捕えられて、皮膚にプリズムの光を散らした。

「もっと大きいのが欲しいわね」

乞食が左衛子を見つけて、店頭に立った。これ以上は瘡せられないというくらいに肋骨がむき出して、足の脛など、杖のように細い印度人であった。それと見ると運

転手のアブドラが口ぎたなく叱りつけてから、かねて主人に言いつけられているとおり、自分が小銭を出して、追い払うのだった。

確かにマラッカは小ぢんまりした町であった。さかり場の広い通りは、五分も自動車で走ると、カンボン（郊外）の風景となつて、人家がとぎれ椰子の林や畑が現われて来る。床の高いマライ人の住家が見つかつたら、忽ちに町は終るのだ。

「チャイナ・タウン」

と、左衛子は、運転台のアブドラに言いつけた。富も物資も南方では英国人が立ち去つた後は華僑が一手に収めているからだ。

人家の間を流れるマラッカ川は、掘割のように水が濁つていて動かない。華僑の町は、その橋を渡つてから、海岸に沿って長く続いている。それも商店街となつているのは、橋の付近だけで、その奥は、シンガポールあたりの富裕な人たちの、隠宅や、大住宅が軒を並べていて、白昼も門の扉を固く閉ざして人通りも稀な閑静な屋敷町が続くのである。建て方は、どれも同じ様子で、瓦屋根に反りを打たせ、壁が白い表構えに、板の厚い塗戸を左右から閉ざした門の真上には、漆塗りの大きな文字の額を掲げて、

天官賜福

五福臨門

といった風の文字を彫<sup>ほ</sup>って朱や碧<sup>きよく</sup>を塗った聯を掛けてある。客が外に立って案内を乞<sup>こ</sup>われない限り門をあけないので、内部に住む人の声も往来に漏れず、この炎熱の白昼に、この町の生活はまるで密封されたようにひっそりとしているのだ。左衛子のような外来者から見れば、空家ばかりの街を見るような具合で、ただ自動車を一直線に走らせるだけのことである。

印度人の店で、左衛子が買入れたダイヤモンドは三顆であった。まだ他にも同じような店がありそうに思つて窓から探しているのだが、城のような家ばかりが隙間もなく並んでいる閑静な町の外観は、失望に値<sup>あた</sup>った。マラッカは金持ちが隠居する町だと聞いたので、宝石商は多いものと期待して来たのだった。

「帰りましょう」

左衛子は、丘の上で画を描いている画家のことを思い出した。

自動車を返して、さっきの橋の付近まで来ると、前方の通路の中央に自動車が停っているのが見えた。自動車は殆ど全部徴発して、軍の日本側の主な機関が使用していたことで、左衛子は近寄りながら、その車の乗手に注意した。高級車のキャディラックの新式のものだった。

これがパンクしていたので、タイヤを取換えるので、人は降りて道端の樹の陰に立っていた。防暑服の若い海軍士官に、ヘルメット帽をかぶった背広の中年の紳士である。先方からもこちらの自動車を注意して見まもって待っていた。

「あ！」

と、左衛子は急に、

「ドラ、停めて」

急停車した勢いに舞い立った埃を、ヘルメット帽に手を掛け顔をそむけて避けた平服の紳士は、セレーター根拠地の参謀の牛木大佐で、左衛子がこれまで客として観察して来た限りでは、先任参謀の威厳を保とうとしているのか無愛想で、うちとけにくい人柄であった。

「パンクで御座いますか」

大佐は、例の、木の実を嵌<sup>は</sup>めたように固い、きびしい目付で見まもっていたが、

「君は、また、ここに何をしに来たのだ？」

質問の意地悪さを感じながら、

「マラッカを見ていなかったものですから、報道班の画家の方に、案内して頂きましたの」

「見物？」

「ええ、まあ」

にこりとして、大佐の連れれの副官の若い中尉の、これ

は帝大出で、心安くしている方にも会釈を送った。

「見物の時期でもなからうが、連れはあるんだね」

「ええ、お仕事をしていらいっしやるんです」

大佐は相変らず棒のように突立っていたが、

「それで、今日中に、昭南に帰るつもりか」

「ええ、店が御座いますから。でも、お車は大丈夫なん

ですか。御用をお急ぎのようでしたら、手前どものを差

上げて……」

「いや、それまでのことはない。しかし、単車で夜道に

なると、途中が危険だから、帰りは急ぐか、どこかで私

たちを待って一緒に行くといい。昼間はよいが、夜はジ

ョホールの辺が近頃、物騒のような情報が入っている」

「何か出るのでしょうか」

無邪氣らしい驚き方を顔に見せて、左衛子は成功し

た。

「それア……」

と、大佐は、初めて笑って見せて、

「ゲリラも出るが、あの辺は虎の出る名所だ」

「可怖く御座いませんわ。虎でしたら、皆さんのを拝見

して慣れておりますもの。先任参謀は御承知ございます

まいけれど、この今西中尉も虎の方では、なかなか有名

で御座います」

若い中尉は、顔を赤くして、

「おい、マダム」

牛木大佐も笑って見せたが、何となく別の思念にとら

われているような他所らしい笑顔であった。

「危険を、その調子で甘く見るからいかんだ。やはり

我々について一緒に帰った方がい。単車は危険だ。そ

れからだな。ついでのことに、君、これから我々の行く

ところへ一緒に行つて、ある人に、君の純日本風の姿を

見せてやってくれぬか」

「どちらへか？」

「固く断わつて置くが」

結論を下す例の軍人の流儀であった。

「今日のことは堅く秘密にしておいて貰わぬと、いか

ぬ。牛木の私用だが、どこへ行つて、どんな人間に会っ

たか、ということを、女将の胸にだけ、おさめて置いて

貰うのだ」

## 無名氏

平服でいるせいとか、話していると、牛木大佐も日頃と

は違って、うちとけた調子を見せた。多勢の部下の前に

いる時とは気分が違うのであろう。

「その画描きさんは、どこで待っているんだね。ほっと

くのも、悪からうが、ざっと一時間は待つて貰うことに

なる」

「平気な方なんです。スケッチを始めると一日中も、ひとりである人ですから、あたし行って断わってまいっても、いいのですか」

「いや、後で副官をやらう。場所さえ判っておれば……日本人は、算えるほどしかない町だろうから」

大佐は、ヘルメット帽の庇が影を置いてゐる顔で沈黙した。いつまでも平然として無表情でいられる黙り込み方であった。

「どちらへ、おいでになるので御座います」

大佐は、木の実のような形の目で見返してから、まったく別の返事をした。

「和服の女なんて、この十年は見たことのない男だろうね。だが、用談があるので、その間は、君にも遠慮して貰う」

「やはり、海軍の方……？」

「いや、そうではない」

また、きびしい感じの、話の継穂のない返事であった。

タイヤの修理は終っていた。各自の車に戻ると、大佐の自動車を先に、左衛子がたつた今通って来た道を走り始めていた。暑い風が窓から入って来た。

ヘレン・ストリートと、金属板に英文で町名が標示

してあったが、白壁に密封されて、門並に固く塗戸を閉ざしたあの華僑の住宅街である。目的の家が近いことは大佐の車が際立って速度を落して徐行し始めたので知れた。左衛子が見ていると、案内役の副官が、窓から首を出すようにして、一軒ずつ、門を見ている。そして、自動車は急に停止した。

日ざかりの道路に影を黒く副官が降りた。アブドラが扉をあけて左衛子も降りようとすると、若い中尉は真っ直ぐに歩いて来て、

「暫く、……そのまま待っていて下さい」

大佐も降りないで前の車の座席に白色の背中を見せていた。中尉だけが、二段の石階を昇って行き、片側の壁にあけた小さい耳門の呼鈴を押した様子で、立って待っていた。姿勢はよいのだった。

殆ど人通りはなく、街は岑閑と陽に輝いて静かである。左衛子は、中尉が待って立っている頭上に、筏かずらの木が繁っていて紅い花が壁に垂れているのを見た。

自転車が遠くから走って来たが、近くなるとこれが日本の陸軍の兵隊で、憲兵の腕章を付けていたが、華僑の家の前に停っている自動車を怪しんだ様子で、徐行しながら覗き込むように見まもって通った。

マラッカの華僑の大住宅は、道路に面して表構えがど

れも同じ形式を採っているように、家の内部に入っても、様子がほぼ似たものである。

間口は狭いが建物は細長く、奥行きが深い。ヘエレ・ストリートに門があると、家の裏手は海の潮に直接に触れている。つまり、道路と海との間の短冊のように細長い地所を、どの家も一杯に塞いでいるのである。

門内の狭い庭から、すぐに玄関の客間に入る。石だたみの床に正面の壁に寄せて黒檀の卓を置き椅子を配してある。奥へ入る戸口は、この壁の左右に在って、敷居をまたぐと、同じような形式の部屋で、またその左右の戸口の奥が、これと同じ工合に、更に後方の部屋に続く。正面の壁には文字の対聯を掲げたものもあるが、寺のように仏壇を置いた部屋もあつた。

或る部屋の壁には、祖先から代々のこの家の主人だつた夫婦の肖像を、額におさめて並べて飾つてある。これは、この家の歴史であつた。最も古いものは、まだ写真のない時代なので、彩色した画像で、それも竜の模様を胸につけた孔雀の翅を帽子につけた清朝の風俗の老人に、髪結び方も違い纏足した太夫(夫人)が、並んでいる。写真の時代に入ると、服装は南方の気候に順応した簡略のものになっているが、やがて一、二代で男主人は孫逸仙の写真にあるように詰襟の洋服を着ているようになり、夫人は、マレー風に更紗のサロンを腰に巻き、

襟袷のように前で合せる薄い上衣と変化して来る。そして、次の代に来るものは洋服の背広だ。若夫人だけは現代に入つてもマレー風か、広東あたりから移入される今日流行の支那服だ。故国を離れてここに根をおろして以來の家の歴史が、重々しく客を見おろしているのだ。

更に人は、故国中国産の盆石や、夾竹桃の鉢植えのほかに、西洋人の彫刻になる童女や馬や犬の大理石像が部屋の裝飾となり、また原色版の、狩猟や競馬の図が古風な書の額と並んで掲げているのを見るだろう。これは、オクスフォードやケンブリッジに留学した若い主人が、飾りのついた時計などと一緒に英国の土産に持つて帰つたもので、これもこの家の歴史の新しい頁なのだ。

若い主人は、流暢に、倫敦仕込みの本格的英語を話す。

こうして縦に並んだ居間の奥が、中庭のように屋根を抜いて、土間の石の井戸や、かまどのある厨房で、そこから階段が二階にある家族達の居間や寝室に昇っている。大きな木があつて、片側から出た屋根の庇とともに、日陰を作っていて、並んだ水甕の水に涼しい影を投げてゐる。

下男が取次いで来た牛木大佐の名刺をこの家の若主人が受取つたのは、二階から階段を降りる途中であつた。



若主人は、小肥りの軀に単色の背広を上手に着こなし、頭もきれいに撫でつけて、髪を光らしていた。

「日本人？」

と、強く問い返してから、無言で厨房の土間を奥に入つて行つた。

内庭を向うから囲むようにして母屋とは別の棟がある。昔マラッカの海が現代ほど遠浅にならず、貿易がさかんだった時代には、ジャンクをすぐ岸まで寄せ荷揚げをしたので倉庫に用いられた建物だが、貿易の繁栄をシンガポール港に奪われて、マラッカの華僑の家が静かな隠居所や住宅に変化して以来、用のない部屋となつて一部の屋根は破れたままでいる。

若主人の葉氏は、その戸口から入ると、

「シイサン（先生）」

と、呼んだ。

どこも空室で、硝子窓越しに海が見えているのだが、一番奥の部屋から人の声が答えた。

葉氏が、その部屋の戸口に立つと、ヴェランダのような海に向つている縁から、籐椅子を軋ませて、身を起した人物がある。

「お客さんですよ。日本の海軍の士官」

葉氏の言葉は英語だった。手にしていた名刺を見たが、中国人でいて、葉氏は漢字を僅かしか知らないの

で、特に日本人の名刺はよく読み下せないのである。

無言のまま、その人は立ち上つて来た。裾の長い、薄い支那服を着た体格は、南方にいる中国人には珍しく肥っていて、顔も色白で、頬の肉付よく、柔和な福相であつた。

名刺を受取つて読むと、急に顔に血の色がさした。若く見えるが、五十前後の年齢らしいが、皮膚が子供のようになめらかに美しく染まつた。

「心配しないでよい」

と、これも流暢な英語で言つて、

「これは私の古い友人なから。多分、この間やつた手紙を見て、訪問して来てくれたんだろう。ひとりですか」

私は知らない。と葉氏はまだ不安らしい面持で答えた。

「連れがあるかしら？ 私、このカードの男にだけ会いたいのだが……葉さん、そう話してくれませんか。他の人間がいたら外に待たせて置いて……構わないから、この男だけ、この部屋に案内して来て下さい」

「イエス、オーライト」

若主人の葉氏が出て行くと、男は、名刺を見なおした。柔和な顔に普通でなく烈しく動いたものがあつた。その興奮を抑えると、窓に近寄つて日が一面にあたつて